

観光動態調査業務 報告書



下関商工会議所

調査委託：一般社団法人からまち
(都市再生推進法人・地域再生推進法人)

令和8年度伴走型小規模事業者支援推進事業

目次

第1章 調査概要

- 1-1 調査の背景
- 1-2 調査目的
- 1-3 調査の構成
- 1-4 人流調査の概要

第2章 下関市全体の観光動向

- 2-1 下関市の観光客数
- 2-2 宿泊観光の動向
- 2-3 外国人観光客の動向
- 2-4 下関観光における唐戸エリアの重要性

第3章 唐戸エリアの観光特性・位置付け

- 3-1 唐戸エリアの観光資源
- 3-2 徒歩圏に集積する観光施設
- 3-3 門司港との関門周遊
- 3-4 将来的な関門・市内観光動線の変化

第4章 観光客アンケート調査結果

- 4-1 アンケート調査の概要
- 4-2 回答者の居住地
- 4-3 日帰り・宿泊の状況
- 4-4 訪問目的
- 4-5 利用施設
- 4-6 滞在時間
- 4-7 観光消費額
- 4-8 満足度・再訪意向
- 4-9 観光客が感じる不足・改善点

第5章 カモンワープ周辺人流調査結果

- 5-1 人流調査結果の概要
- 5-2 唐戸市場ーカモンワープ間の人流
- 5-3 カモンワープーあるかぼーと方面の人流
- 5-4 商店街ーカモンワープ間の人流
- 5-5 時間帯別の特徴
- 5-6 土曜日と日曜日の比較

第6章 アンケートによる観光行動 消費行動のクロス分析

- 6-1 クロス分析の目的
- 6-2 宿泊の有無と消費額
- 6-3 滞在時間と消費額
- 6-4 利用施設数と消費額
- 6-5 居住地と観光行動

第7章 人流データからみた唐戸エリアの 回遊構造

- 7-1 分析の目的と対象
- 7-2 ウォーターフロントにおける主要道線
- 7-3 唐戸商店街とウォーターフロントのつながり
- 7-4 時間帯別にみた回遊の特徴
- 7-5 回遊構造の特徴と課題

第8章 総合分析 唐戸・カモンワープ 観光の現状と課題

- 8-1 観光客の来訪・滞在の特徴
- 8-2 観光消費と滞在・周遊の関係
- 8-3 ウォータフロントと商店街の関係
- 8-4 観光客の満足度と受け入れ環境の課題
- 8-5 総合分析からみた主要課題

第9章 調査結果を踏まえた今後の方向性

- 9-1 エリア全体の回遊促進
- 9-2 交通・駐車場環境の改善
- 9-3 観光客の滞在環境の充実
- 9-4 滞在時間の延長と観光消費の拡大
- 9-5 継続的なデータ活用と関係者連携
- 9-6 まとめ



第1章 調査概要

1-1 調査の背景

下関市は、関門海峡、唐戸市場、しものせき水族館「海響館」、カモンワーフ、赤間神宮、巖流島、火の山、城下町長府など、多様な観光資源を有している。

なかでも唐戸エリアは、唐戸市場を中心とした「食」、海響館を中心とした「観光・レジャー」、関門汽船による「門司港との広域周遊」、カモンワーフや唐戸商店街における「飲食・買物」など、複数の観光機能が徒歩圏内に集積する下関市を代表する観光エリアである。

一方で、観光客がどの施設を訪れ、どの程度エリア内を回遊し、どの程度滞在・消費しているのかについては、施設ごとの利用者数だけでは十分に把握することが難しい。また、多くの観光客が訪れる唐戸市場や海響館等の集客力を、周辺商業施設や商店街、飲食店等へどのように波及させるかについても、今後の唐戸エリアの観光振興を考える上で重要な課題となっている。

そこで本調査では、観光客アンケートに加え、人流センサー及び既設AIカメラによる通行量調査を実施し、唐戸エリアにおける観光客の属性、観光行動、消費行動及びエリア内の人流を複合的に分析することとした。



1-2 調査目的

本調査の目的は、下関市及び唐戸エリアを訪れる観光客の実態を把握するとともに、唐戸市場、カモンワーフ、あるかぼーと、海響館、関門汽船乗り場及び唐戸商店街等の間に生じている人の流れを可視化することである。

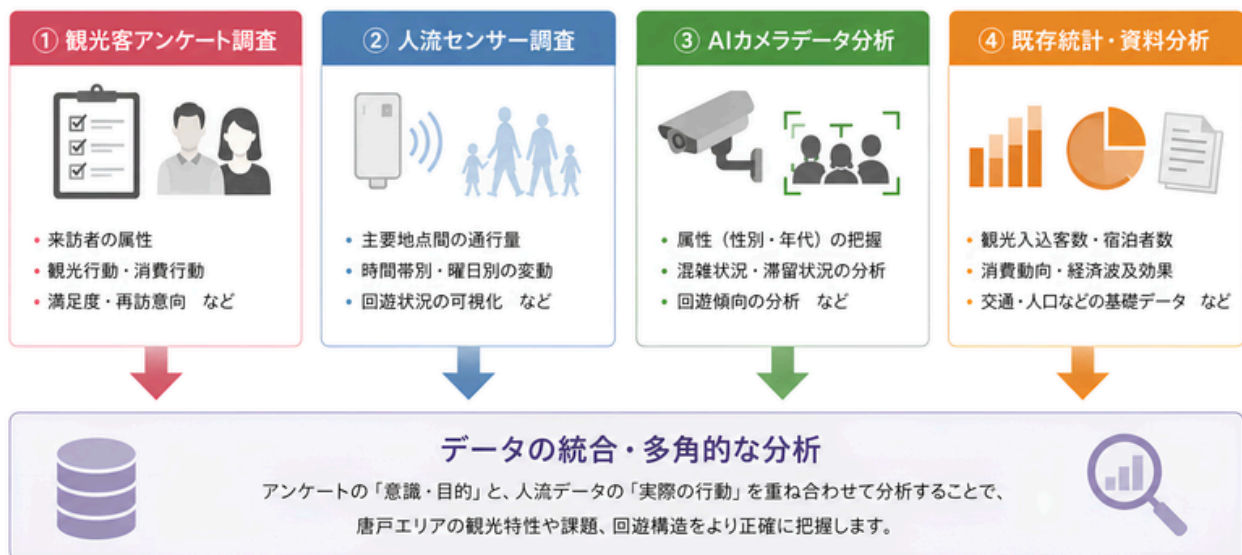
特に、「どれだけの人が訪れているか」という集客規模だけでなく、「どこから来たのか」「何を目的に訪れたのか」「どの施設を利用したのか」「どの程度滞在したのか」「どの程度消費したのか」までを把握することにより、今後の観光振興及び地域内消費の拡大につながる基礎資料とする。

1-3 調査の構成

本調査は、大きく「観光客アンケート調査」「人流センサー調査」「AIカメラデータ分析」「既存統計・資料分析」の4つから構成する。

観光客アンケートでは来訪者の属性や観光行動、消費行動、満足度等を把握し、人流調査では主要地点間の実際の通行量を把握する。

これらを組み合わせることで、アンケートだけでは把握できない実際の人流と、人流データだけでは把握できない観光客の目的や意識を相互に補完しながら分析する。

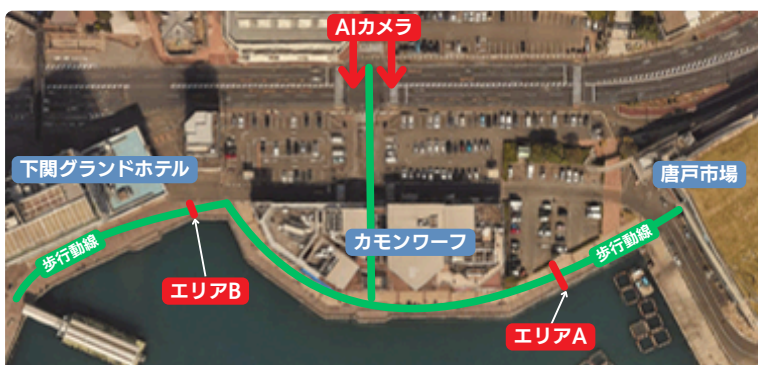


1-4 人流調査の概要

人流調査については、2026年8月8日午前9時から8月10日午前9時までの期間、人流センサーを唐戸エリア内の主要動線2地点に設置した。

1地点目は「唐戸市場とカモンワーフを結ぶ動線」、2地点目は「カモンワーフとあるかぽーと・海響館・関門汽船乗り場方面を結ぶ動線」である。

また、唐戸商店街とカモンワーフを結ぶ動線については、既設のAIカメラ2台から取得したデータを合算して分析した。



第2章 下関市全体の観光動向

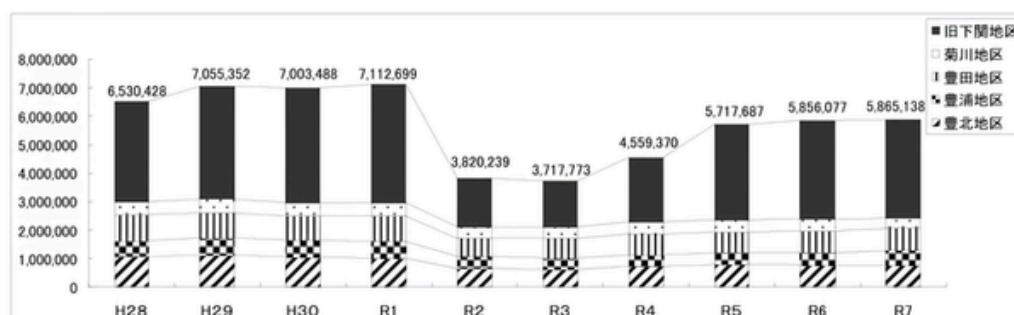
2-1 下関市の観光客数

下関市は、山口県内でも有数の観光都市であり、市内には歴史、食、自然、レジャーなど多様な観光資源が存在している。

令和7年の下関市全体の観光客数は約586.5万人となっており、そのうち旧下関地区は約344.9万人と、市全体の約6割を占めている。このことから、唐戸を含む旧下関地区が市内観光の中心的な役割を担っていることが分かる。

観光客数の推移

～地区別～	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7
旧下関地区	3,531,287	3,970,733	4,036,944	4,148,403	1,704,227	1,595,364	2,268,076	3,355,666	3,455,767	3,448,686
菊川地区	453,606	484,493	472,567	472,631	406,006	406,184	431,068	430,670	426,175	361,646
豊田地区	916,896	874,657	836,185	894,454	636,049	695,117	734,544	719,282	770,151	780,630
豊浦地区	557,607	597,729	596,770	588,476	422,328	400,138	390,683	428,509	430,406	511,536
豊北地区	1,071,032	1,127,740	1,061,022	1,008,735	651,629	620,970	734,999	783,560	773,578	762,640
合 計	6,530,428	7,055,352	7,003,488	7,112,699	3,820,239	3,717,773	4,559,370	5,717,687	5,856,077	5,865,138



出典：下関市「令和7年の下関市観光客数・宿泊客数について」（令和8年3月）

2-2 宿泊観光の動向

下関市の観光を考える上では、観光客数だけでなく、宿泊につながっているかという視点も重要である。宿泊を伴う観光は、宿泊費に加え、夕食、朝食、買物、交通など地域内での消費機会が増えることから、地域経済への波及効果が大きい。

今後は、単純な来訪者数の増加だけではなく、「日帰り観光から宿泊観光への転換」や「宿泊客の市内回遊」を促進することが重要となる。

2-3 外国人観光客の動向

訪日外国人旅行市場の回復に伴い、下関市においても外国人宿泊客が増加している。下関市は韓国・釜山との国際航路を有するとともに、福岡県や北九州市からのアクセスにも優れており、九州・山口を周遊する外国人観光客を取り込むことが可能な立地にある。

唐戸エリアについても、多言語案内、キャッシュレス対応、公共交通情報、門司港を含めた周遊情報など、外国人観光客が移動しやすい環境づくりが今後さらに重要になると考えられる。

2-4 下関観光における唐戸エリアの重要性

下関市内には複数の観光エリアが存在するが、唐戸エリアの特徴は、複数の大型観光施設が徒歩圏内に集中していることである。

唐戸市場、カモンワーフ、海響館、あるかぽーと、赤間神宮、関門汽船乗り場、唐戸商店街などを徒歩で移動できるため、「施設単体」ではなく「エリア全体」として観光を楽しめる可能性を持っている。したがって、唐戸エリアの今後の課題は、個々の施設への集客だけではなく、それぞれの集客力を相互に結び付け、エリア内の回遊・滞在・消費へ転換することである。



唐戸市場



関門橋



赤間神宮



長州藩が設置した砲台のレプリカ

第3章 唐戸エリアの観光特性・位置付け

3-1 唐戸エリアの観光資源

唐戸エリアには、「食」「海」「歴史」「レジャー」「買物」「交通」といった異なる観光機能がコンパクトに集積している。特に唐戸市場は、寿司や海産物を目的として多くの観光客が訪れる強力な集客施設となっている。また、海響館、カモンワーフ、あるかぽーと、関門汽船乗り場などが海沿いに連続しており、ウォーターフロントそのものが観光動線を形成している。

3-2 徒歩圏に集積する観光施設

唐戸の大きな強みは、主要観光施設間を徒歩で移動できることである。

自動車や公共交通機関で施設間を移動する観光地と比較すると、徒歩による偶発的な立ち寄りや飲食、買物を生み出しやすい。

そのため、施設間の移動経路そのものを魅力的にすることが、地域全体の観光消費を高める重要な要素となる。



3-3 門司港との関門周遊

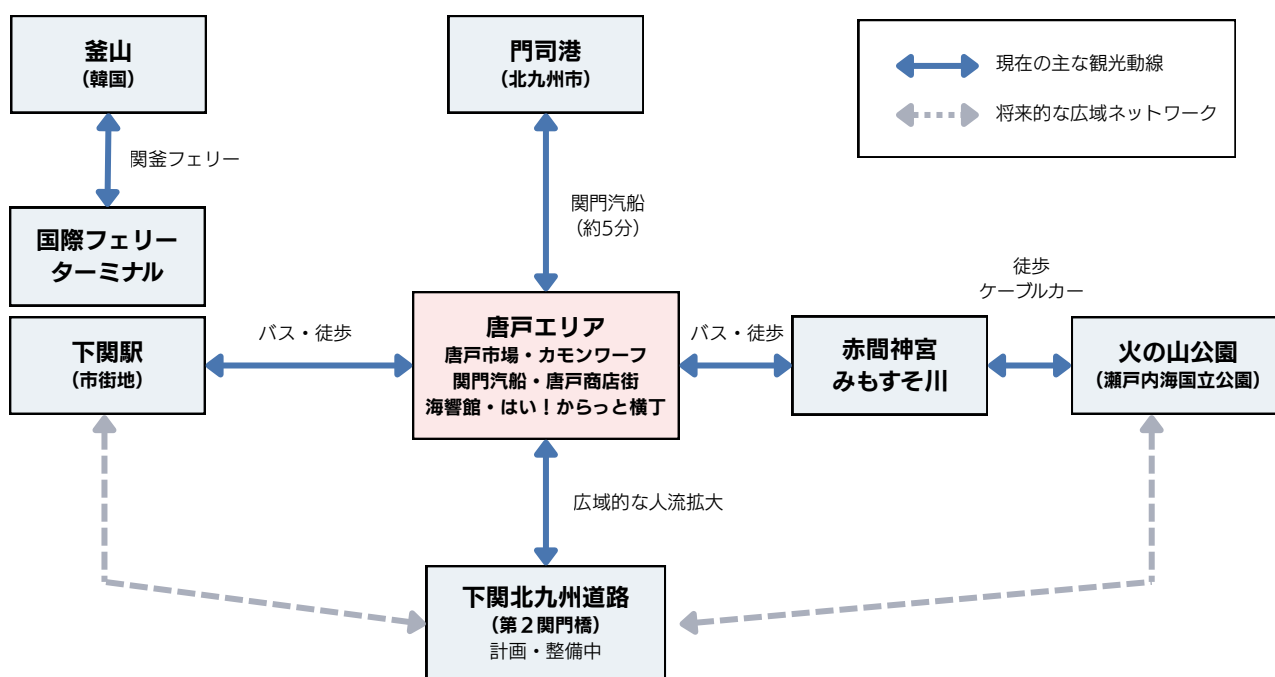
唐戸は、関門汽船によって門司港と短時間で結ばれていることも大きな特徴である。行政区域としては山口県下関市と福岡県北九州市に分かれているものの、観光客から見れば、唐戸と門司港は一つの旅行行程として周遊することが可能である。今後は「下関市内だけで観光客を囲い込む」という考え方ではなく、関門エリア全体の魅力を高め、その中で唐戸への滞在時間と消費機会を増やすという視点も重要となる。

3-4 将来的な関門・市内観光動線の変化

唐戸エリアの観光を考える上では、現在の観光客の動きに加え、今後予定されている周辺地域の整備や交通環境の変化を中長期的な視点から捉えることも重要である。現在、火の山では関門海峡の眺望、歴史、自然を活かした再編整備が進められており、新たな観光拠点としての魅力向上が期待されている。また、下関市と北九州市を新たに結ぶ「下関北九州道路」についても都市計画決定が行われており、長期的には関門エリアにおける広域的な人の流れに変化をもたらす可能性がある。

市内に目を向けると、唐戸を単独の観光地として捉えるのではなく、**下関駅・国際フェリーターミナル → 海峡ゆめタワー・豊前田 → あるかぼーと → 唐戸 → 赤間神宮 → みもすそ川・火の山**へと続く、関門海峡沿いの観光動線として捉える視点も重要となる。

下関駅から唐戸にかけてのウォーターフロントや、海側と唐戸商店街を結ぶ動線の整備も進められている。こうした周辺整備や交通環境の変化を踏まえると、将来的には唐戸が、下関駅方面・門司港方面・火の山方面をつなぐ「関門観光の結節点」として、より重要な役割を担うことが期待される。

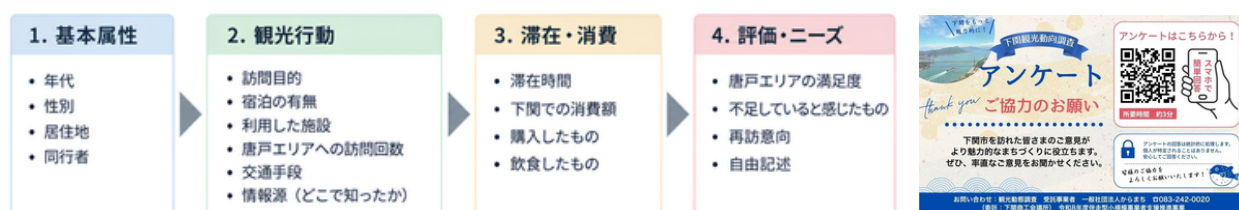


第4章 観光客アンケート調査結果

4-1 アンケート調査の概要

唐戸エリアを訪れる観光客の属性や来訪目的、滞在・消費行動等を把握し、地域の観光特性や今後の課題を明らかにするため、来訪者を対象としたアンケート調査を実施した。調査では、年代・居住地などの基本属性をはじめ、訪問目的、同行者、宿泊の有無、利用施設、訪問頻度、滞在時間、交通手段、情報収集方法、下関での消費予定額、満足度、再訪意向等を確認した。また、観光客が不足していると感じる施設やサービス、自由記述による意見も収集し、来訪者の評価や改善ニーズの把握を図った。調査はGoogleフォームを活用したWebアンケート方式で実施し、最終的に312件の回答を得た。回答データは個人を特定しない形で集計し、来訪者の属性や観光行動、消費傾向について整理した。

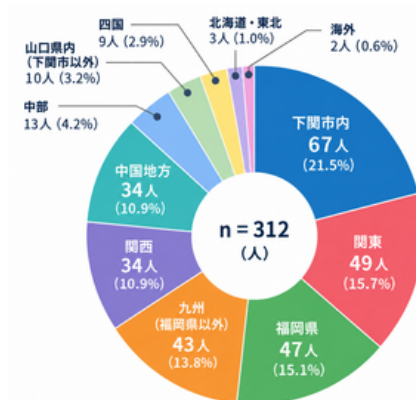
本章では、各設問の集計結果から唐戸エリアの観光利用の実態と特徴を明らかにする。さらに第6章では、宿泊の有無、滞在時間、利用施設数、居住地等を組み合わせたクロス分析を行い、観光行動と消費行動の関連性について検討する。



4-2 回答者の居住地

下関市内からの回答に加え、福岡県や九州各県、関東・関西など幅広い地域からの来訪が確認され、県外からの回答が多くを占めた。

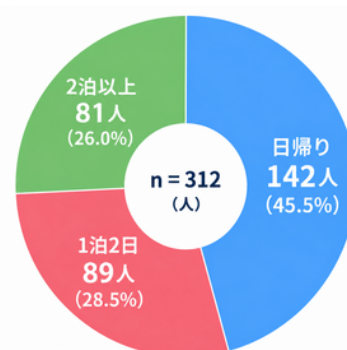
このことから、唐戸エリアは市民の日常的な利用場所であると同時に、広域から観光客を呼び込む観光地としての役割を担っており、幅広い地域からの集客力を持つことがうかがえる。



4-3 日帰り・宿泊の状況

日帰り客と宿泊を伴う来訪者の双方から回答が得られ、宿泊を伴う来訪者がやや多い結果となり、旅行形態の多様性が確認された。

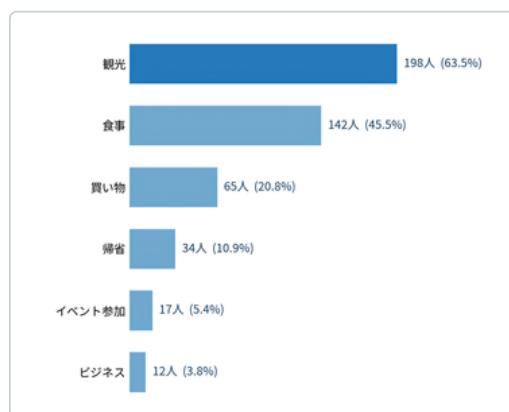
宿泊を伴う旅行では、飲食や買い物に加え、夕方以降や翌日の観光など、滞在時間の延長や地域内での消費機会が広がることが考えられ、観光振興において重要な層となる。



4-4 訪問目的

訪問目的は「観光」と「食事」が中心となっており、唐戸市場やカモンワーフをはじめとする観光・飲食施設が、来訪の大きなきっかけとなっていることがうかがえる。

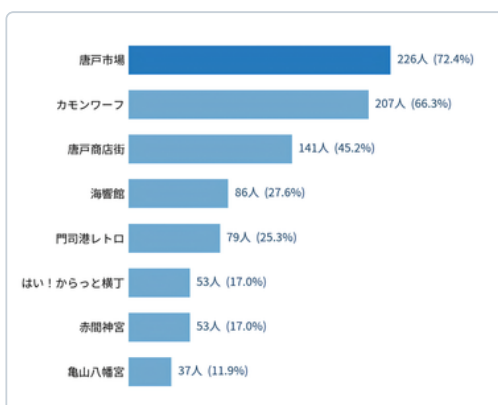
一方、買い物やイベント参加など、多様な目的による来訪も確認されており、観光需要の幅広さがみられ、地域の多様な魅力が来訪につながっている。



4-5 利用施設

唐戸市場とカモンワーフの利用が多く、両施設が主要な観光拠点となっていることが確認された。

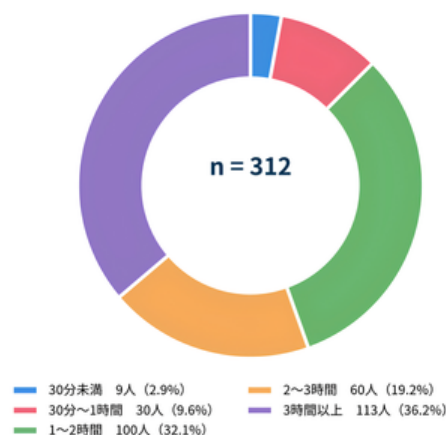
また、唐戸商店街や海響館、門司港レトロ等の利用もみられ、ウォーターフロントから市街地、さらには関門エリアへと広がる観光行動がうかがえ、複数施設を組み合わせた周遊の可能性がみられる。こうした施設間のつながりも唐戸の特徴といえる。



4-6 滞在時間

唐戸エリアでの滞在時間は、3時間以上の回答が最も多く、比較的長時間滞在する来訪者が一定数確認され、エリア内での滞在需要がうかがえる。

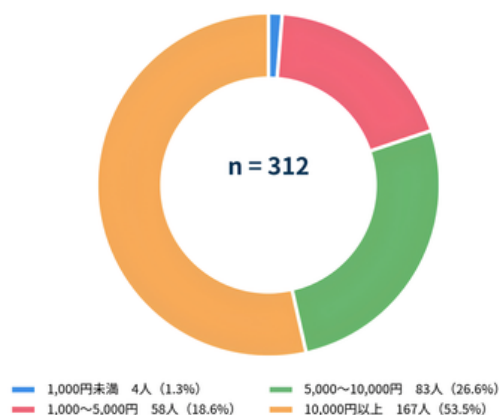
一方、短時間の立ち寄りもみられることから、来訪目的や利用施設によって滞在の仕方が異なり、多様な観光スタイルが存在すると考えられる。滞在時間の違いは消費行動にも関係する可能性がある。



4-7 観光消費額

下関での消費予定額は、比較的高い金額区分を選択した回答者が多く、観光に伴う一定の消費意欲がうかがえる結果となった。

観光消費には、宿泊の有無や滞在時間、利用施設数などが関係している可能性があり、これらの関係については第6章のクロス分析で詳しく検証し、観光消費の特徴を整理する。また、来訪者の行動特性による違いにも着目する。



4-8 満足度・再訪意向

観光に対する満足度は全体的に高く、「大変満足」「満足」と回答した来訪者が大多数を占める結果となった。また、再訪意向についても肯定的な回答が多く、唐戸エリアを含む下関観光が来訪者から高く評価されていることがうかがえる。特に、満足度と再訪意向の双方で良好な結果が得られたことは、観光地としての魅力を考える上で重要な特徴といえる。

唐戸市場やカモンワープを中心とした飲食・買い物の魅力に加え、関門海峡の景観や周辺観光施設の集積など、多様な観光資源が来訪者の満足度を支えている可能性がある。また、徒歩圏内に複数の観光施設が立地していることも、来訪者がさまざまな楽しみ方を選択できる要素となっている。

一方で、高い満足度が必ずしも実際の再訪につながるとは限らない。今後は、継続的な情報発信や季節ごとのイベント、時間帯によって異なる楽しみ方の提供など、再び訪れるきっかけを生み出すことも重要となる。こうした高い満足度と再訪意向を基盤として、地域全体の魅力を維持・向上させ、継続的な観光客の誘致やリピーターの確保につなげていくことが期待される。

4-9 不足しているもの・自由記述

アンケートでは、休憩スペースや駐車場、トイレなど、観光客が快適に滞在するための施設やサービスに関する改善要望が寄せられた。特に、観光客が集中する時間帯の混雑や、夏季の暑さに対応できる休憩環境など、滞在時の利便性に関わる課題がうかがえる。これらは観光施設そのものの魅力とは別に、来訪者の滞在体験を左右する重要な要素と考えられる。

自由記述では、日陰や空調のある休憩場所、飲食スペースの確保、駐車場周辺の混雑緩和、観光案内の充実など、具体的な改善を求める意見がみられた。また、夕方以降の飲食店や営業時間に関する要望もあり、観光客がより長く滞在できる環境づくりの必要性が示唆されている。特に、観光施設間を徒歩で移動する来訪者にとって、移動途中で休憩できる場所や分かりやすい案内表示の充実は、回遊のしやすさにも関係すると考えられる。

一方、食事のおいしさや関門海峡の景観、観光施設の魅力を評価する声も寄せられており、唐戸エリアが持つ観光資源そのものへの評価は高い。今後は、こうした既存の魅力を維持しながら、休憩環境や交通アクセス、案内機能などを改善することが重要である。観光客の視点から滞在環境を整えることで、満足度のさらなる向上に加え、エリア内の回遊促進や滞在時間の延長、地域での消費機会の拡大につながることが期待される。

■ 主な改善要望の整理

分野	主な回答・意見
休憩・滞在環境	日陰、空調のある休憩場所、飲食スペース
駐車場・交通	駐車場の混雑、周辺道路の渋滞、バス案内
トイレ・設備	トイレの数や清潔さ、子連れ向け設備
飲食・営業時間	夕方以降の飲食店、営業時間の拡充
観光案内・周遊	分かりやすい案内表示、観光マップ、モデルルート

出典：観光客アンケート最終集計312件。自由記述は173件。表は代表的な意見を要約したもので、回答数による順位ではありません。

第5章 カモンワーフ周辺人流調査結果

5-1 人流調査結果の概要

唐戸エリアにおける観光客等の移動状況を把握するため、唐戸市場、カモンワーフ、あるかぼーと方面及び唐戸商店街を結ぶ主要な動線について、人流センサー及びAIカメラによる計測を実施した。

本調査では、ウォーターフロントを中心とした主要な観光動線として、「唐戸市場ーカモンワーフ間」「カモンワーフあるかぼーと方面」の2地点を人流センサーにより計測した。また、ウォーターフロントと市街地側を結ぶ動線として、「唐戸商店街ーカモンワーフ間」について、既設のAIカメラ2台の計測データを合算して通行状況を把握した。

調査の結果、唐戸市場ーカモンワーフ間では、8月8日（土）に8,556件、8月9日（日）に10,049件、2日間合計で18,605件の通行が確認された。また、カモンワーフあるかぼーと方面では、8月8日（土）に8,123件、8月9日（日）に9,653件、2日間合計で17,776件となった。唐戸商店街ーカモンワーフ間では、8月8日（土）に1,267件、8月9日（日）に1,449件、2日間合計で2,716件となった。

地点	2日間合計	8月8日（土）	8月9日（日）
唐戸市場ーカモンワーフ間	18,605 件	8,556 件	10,049 件
カモンワーフあるかぼーと方面	17,776 件	8,123 件	9,653 件
唐戸商店街ーカモンワーフ間	2,716 件	1,267 件	1,449 件

日別にみると、3地点すべてにおいて、8月9日（日）の通行量が8月8日（土）を上回る結果となった。唐戸市場ーカモンワーフ間では約17.4%、カモンワーフあるかぼーと方面では約18.8%、唐戸商店街ーカモンワーフ間では約14.4%増加しており、日曜日の方が全体的に人流が多い傾向が確認された。

また、時間帯別の計測結果をみると、地点ごとに異なる特徴がみられた。唐戸市場ーカモンワーフ間及びカモンワーフあるかぼーと方面では、午前から昼にかけて通行量が多くなる傾向が確認された。一方、唐戸商店街ーカモンワーフ間では、日曜日は昼過ぎに通行量が多くなったほか、土曜日は夜間にも特徴的な増加がみられた。

このように、唐戸エリアでは、主要な観光施設が集積するウォーターフロントを中心にまとまった人流が確認されるとともに、曜日や時間帯、計測地点によって人流の現れ方に違いがあることが確認された。次節以降では、各地点の計測結果について、日別・時間帯別の推移を詳しく整理する。

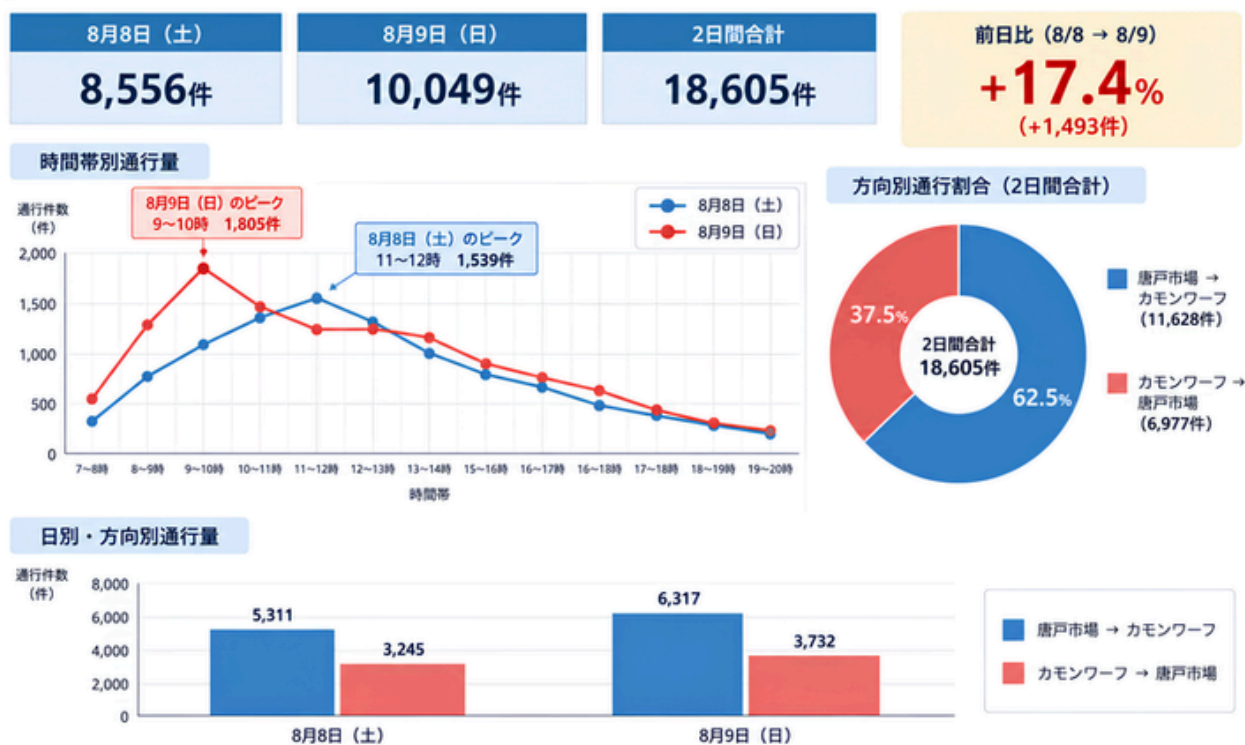
5-2 唐戸市場－カモンワーフ間の人流

唐戸市場とカモンワーフを結ぶ動線に設置した人流センサーの計測結果では、**8月8日（土）は8,556件、8月9日（日）は10,049件の通行が確認され、2日間の合計は18,605件**となった。

日別に比較すると、日曜日は土曜日を1,493件上回り、約17.4%多い結果となった。両日とも多くの通行が確認されており、唐戸市場とカモンワーフの間が、唐戸エリアにおける主要な観光動線の一つとなっていることがうかがえる。

時間帯別では、8月8日（土）は午前中から通行量が増加し、11時～12時の1,539件が最も多く、その後は徐々に減少した。一方、8月9日（日）はより早い時間帯から通行量が増加し、9時～10時の1,805件をピークとして、午前中を中心に高い水準で推移した。

また、方向別では、唐戸市場からカモンワーフ方面への通行が両日とも全体の約62.5%を占めており、カモンワーフから唐戸市場方面への通行を上回った。このことから、唐戸市場－カモンワーフ間では、特に午前から昼にかけて人流が集中する傾向が確認された。また、土曜日と日曜日ではピークとなる時間帯に違いがみられ、曜日によって観光客の行動時間帯が異なることがうかがえる。



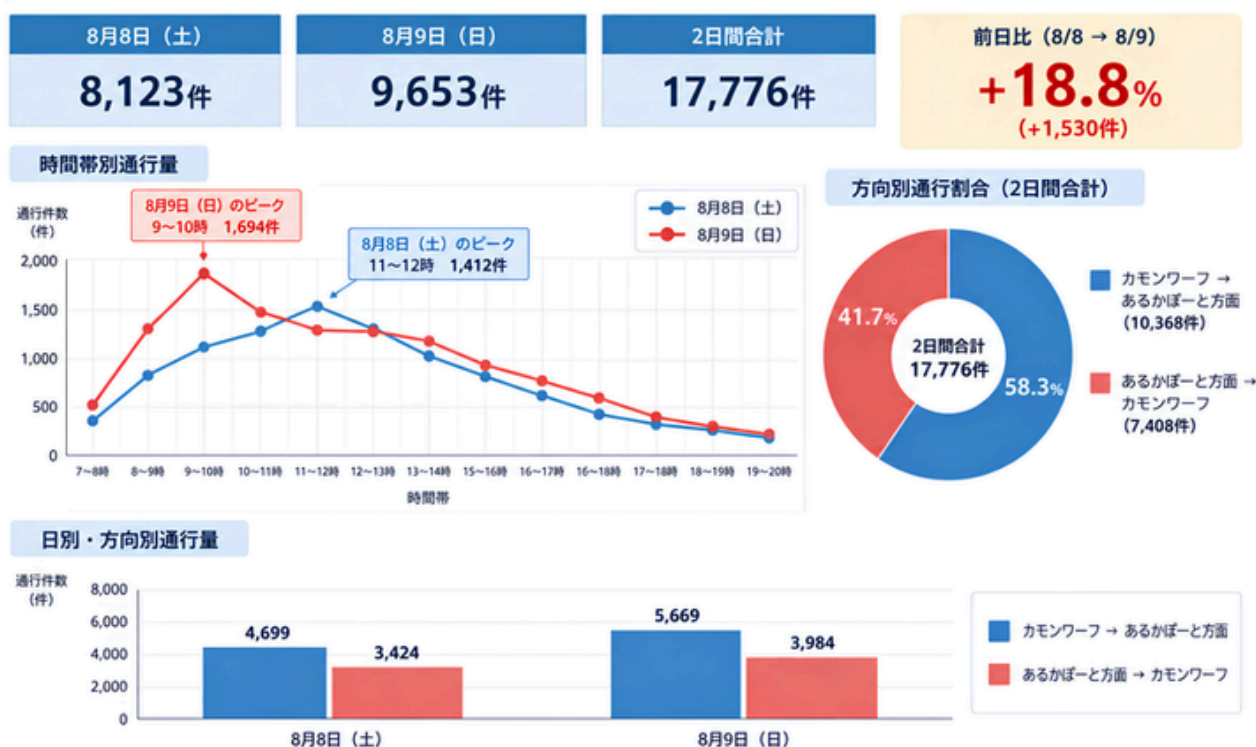
5-3 カモンワーフあるかぼーと方面の人流

カモンワーフとあるかぼーと・海響館方面を結ぶ動線に設置した人流センサーの計測結果では、**8月8日（土）は8,123件、8月9日（日）は9,653件の通行が確認され、2日間の合計は17,776件**となった。

日別に比較すると、日曜日は土曜日を1,530件上回り、約18.8%多い結果となった。両日とも8,000件を超える通行が確認されており、カモンワーフとあるかぼーと・海響館方面を結ぶ動線においても、多くの人流が形成されていることが確認された。

時間帯別では、両日とも午前中から昼にかけて通行量が多く、その後は徐々に減少する傾向がみられた。8月8日（土）は昼前後まで比較的高い水準が続き、8月9日（日）についても午前中から多くの通行が確認された。唐戸市場ーカモンワーフ間と比較すると、あるかぼーと方面では昼頃まで一定の人流が継続している点が特徴としてみられる。

また、方向別では、カモンワーフからあるかぼーと・海響館方面への通行が全体の約58%、あるかぼーと方面からカモンワーフへの通行が約42%となり、カモンワーフからあるかぼーと方面へ向かう通行がやや多い結果となった。これらの結果から、カモンワーフあるかぼーと方面についても、唐戸市場ーカモンワーフ間と同様に、唐戸エリアにおける主要な観光動線の一つとして継続的な人流が形成されていることが確認された。



5-4 唐戸商店街ーカモンワーフ間の人流

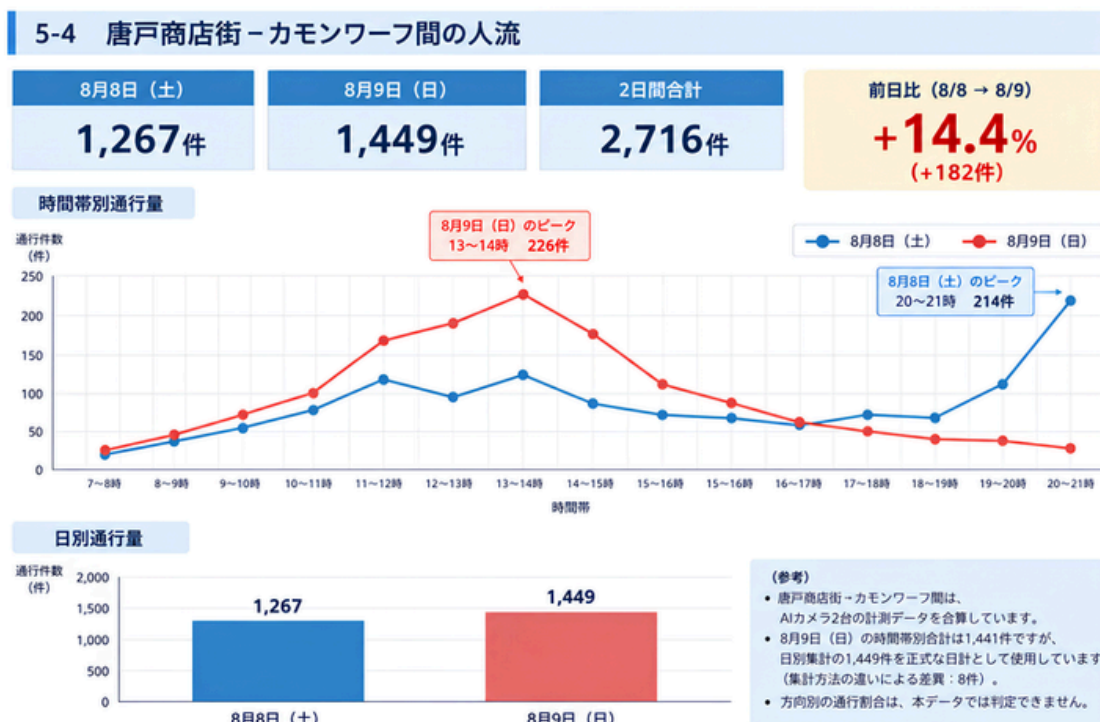
唐戸商店街とカモンワーフを結ぶ動線について、既設のAIカメラ2台の計測データを合算し、通行状況を整理した。その結果、**8月8日（土）は1,267件、8月9日（日）は1,449件となり、2日間の合計は2,716件**であった。

日別に比較すると、8月9日（日）は8月8日（土）を182件上回り、約14.4%多い結果となった。唐戸市場ーカモンワーフ間及びカモンワーフあるかぽーと方面と同様に、日曜日の通行量が土曜日を上回る傾向がみられた。

時間帯別にみると、8月9日（日）は午前中から通行量が増加し、13時～14時の226件が最も多く、その後は徐々に減少する傾向がみられた。一方、8月8日（土）は日中の通行に加え、20時～21時に214件と大きく増加しており、夜間に特徴的な人流が確認された。

このように、唐戸商店街ーカモンワーフ間では、土曜日と日曜日で時間帯別の人流に異なる動きがみられた。特に、日曜日は昼間を中心とした人流、土曜日は夜間にもまとまった人流が確認されており、曜日によって市街地側とウォーターフロント側を行き来する時間帯に違いがみられる結果となった。

なお、本地点はAIカメラによる計測であり、唐戸市場ーカモンワーフ間及びカモンワーフあるかぽーと方面で使用した人流センサーとは、計測方法や計測範囲が異なる。このため、各地点の通行件数については単純な大小比較ではなく、それぞれの地点における人流の規模や時間帯別の傾向を把握するデータとして取り扱う必要がある。



5-5 時間帯別の人流動向

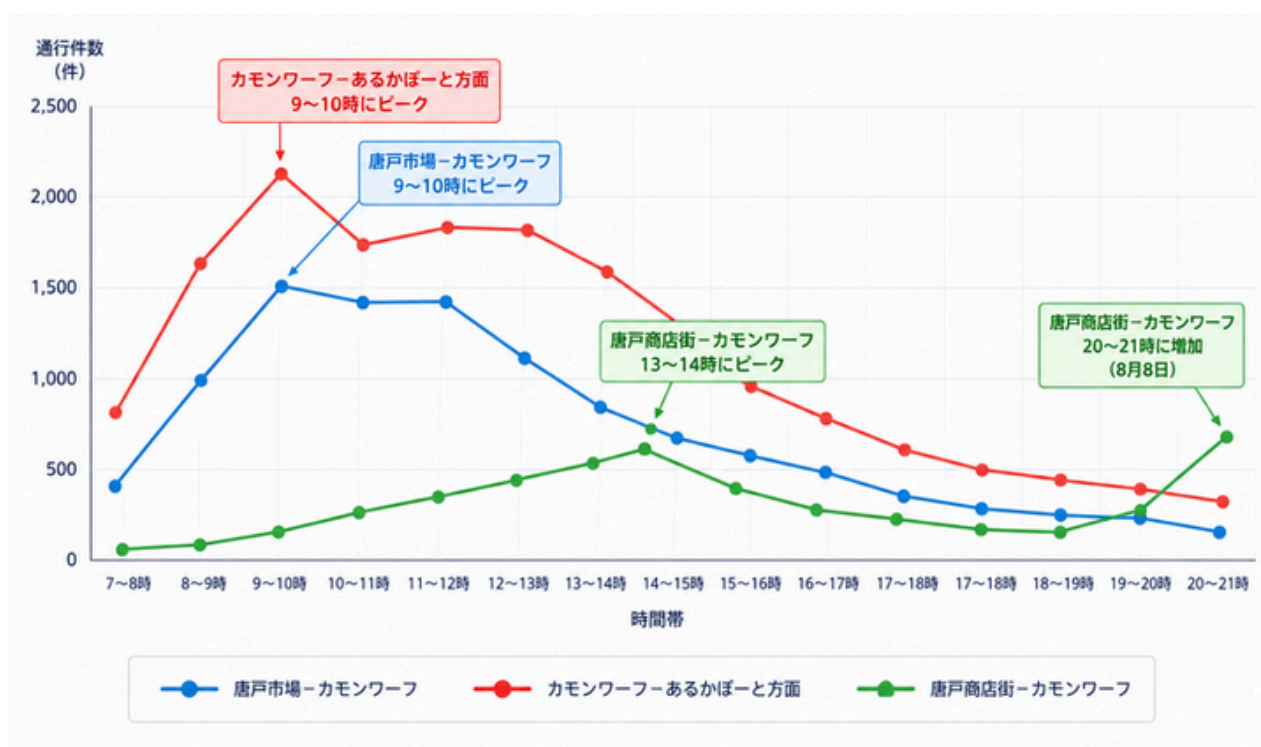
各調査地点の時間帯別データを比較すると、唐戸エリアの人流は、午前から昼にかけて大きくなる傾向が確認された。一方で、地点や曜日によってピークとなる時間帯には違いがみられた。

唐戸市場ーカモンワーフ間では、8月8日（土）は11時～12時、8月9日（日）は9時～10時に最も多くの通行が確認され、特に日曜日は比較的早い時間帯から人流が大きくなった。

カモンワーフあるかぼーと方面についても、午前中から通行量が増加し、昼前後まで高い水準が継続する傾向がみられた。唐戸市場ーカモンワーフ間とあわせてみると、ウォーターフロント側では午前から昼にかけてまとまった人流が形成されている。

一方、唐戸商店街ーカモンワーフ間では異なる動きもみられた。8月9日（日）は13時～14時にピークを迎えており、ウォーターフロント側の2地点よりも遅い時間帯に通行量が多くなった。また、8月8日（土）は20時～21時にも大きな通行が確認されており、夜間にも特徴的な人流がみられた。

以上から、唐戸エリアでは一日を通じて人流が一様に発生しているのではなく、午前中は唐戸市場周辺、昼前後はカモンワーフ・あるかぼーと方面、午後には商店街側との動線にも人流がみられるなど、時間帯によって各地点の人流に異なる特徴がみられた。



5-6 土曜日・日曜日の比較

8月8日（土）と8月9日（日）の人流を比較すると、すべての調査地点において日曜日の通行量が土曜日を上回る結果となった。

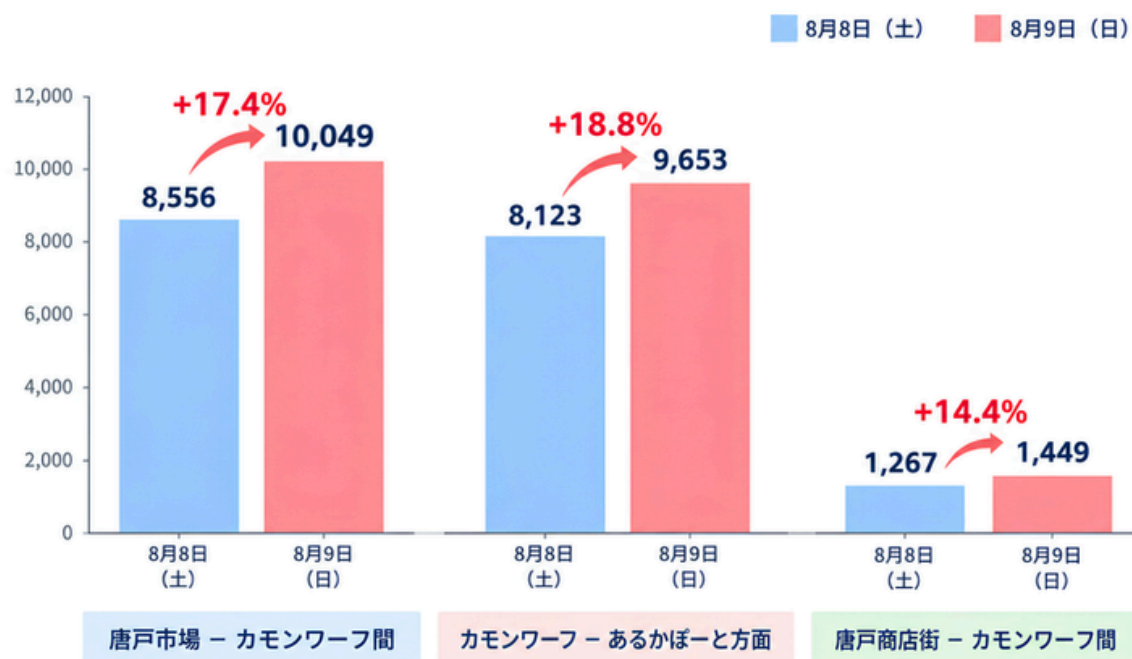
唐戸市場－カモンワフ間では、土曜日の8,556件に対して日曜日は10,049件となり、1,493件、約17.4%増加した。また、カモンワフ－あるかぽーと方面では、土曜日の8,123件に対して日曜日は9,653件となり、1,530件、約18.8%増加した。唐戸商店街－カモンワフ間についても、土曜日の1,267件に対して日曜日は1,449件となり、182件、約14.4%増加した。

このことから、今回の調査期間においては、特定の地点だけではなく、唐戸エリアの主要な調査地点全体で日曜日の人流が多かったことが確認された。

一方、時間帯別にみると、単純に日曜日の通行量が一日を通して多いわけではなく、曜日によって人流が集中する時間帯にも違いがみられた。特に唐戸市場－カモンワフ間では、土曜日は11時～12時にピークを迎えたのに対し、日曜日は9時～10時にピークを迎えており、日曜日の方が早い時間帯から大きな人流が形成されている。

また、唐戸商店街－カモンワフ間では、日曜日は13時～14時に通行量が最も多くなった一方、土曜日は20時～21時にも大きな増加が確認されるなど、ウォーターフロント側の2地点とは異なる時間帯の特徴がみられた。

以上から、今回の調査では、日曜日は土曜日と比較して唐戸エリア全体の人流規模が大きい傾向が確認された。また、曜日によって人流が集中する時間帯にも違いがみられることから、唐戸エリアの人流を把握する上では、1日単位の通行量だけでなく、時間帯別の動向もあわせて捉えることが重要である。



第6章 アンケートによる観光行動 消費行動のクロス分析

6-1 クロス分析の目的

本章では、観光客アンケート調査で得られた312件の回答をもとに、来訪者の属性や旅行形態、観光行動と消費行動の関係についてクロス分析を行う。

第4章で整理した各設問の単純集計では、来訪者全体の傾向を把握することができる一方、宿泊の有無や滞在時間、利用施設数などの違いによって、消費行動にどのような特徴がみられるかまでは明らかにできない。

そこで、宿泊形態と消費額、滞在時間と消費額、利用施設数と消費額、居住地と観光行動の関係を整理し、来訪者の行動特性による違いを把握する。

これらの分析を通じて、唐戸エリアにおける滞在や周遊と観光消費の関係を検討し、今後の観光振興や地域内での消費機会の拡大に向けた基礎資料とする。

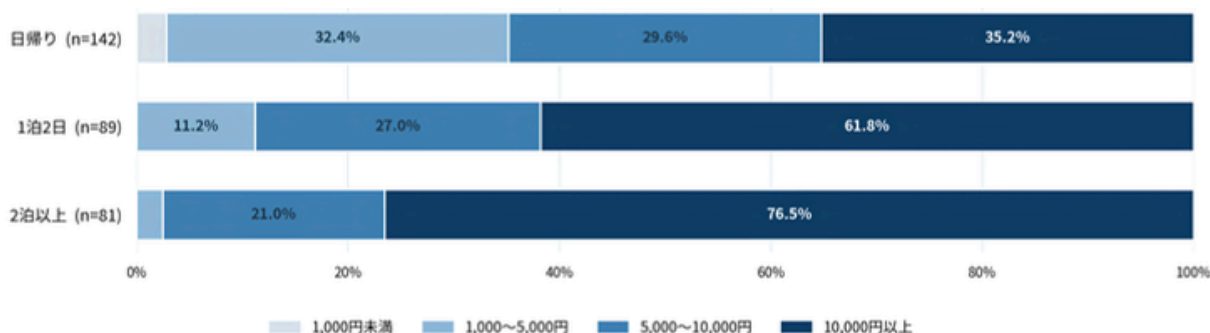


6-2 宿泊の有無と消費額

宿泊の有無と観光消費額の関係を分析した結果、宿泊を伴う来訪者ほど、高い消費額区分を選択する傾向が確認された。特に2泊以上の回答者では、10,000円以上の消費を予定する割合が高く、日帰り客との違いが明確に表れている。

この背景には、宿泊費や複数日にわたる飲食、買い物、観光施設の利用など、旅行期間の長さに応じて消費機会が増えることが考えられる。一方、日帰り客についても一定の消費が確認されており、短時間の観光においても飲食や買い物が重要な消費機会となっていることがうかがえる。

こうした結果から、宿泊を伴う観光客の誘致に加え、日帰り客の滞在や周遊を促すことも、地域における観光消費の拡大を考える上で重要な視点となる。

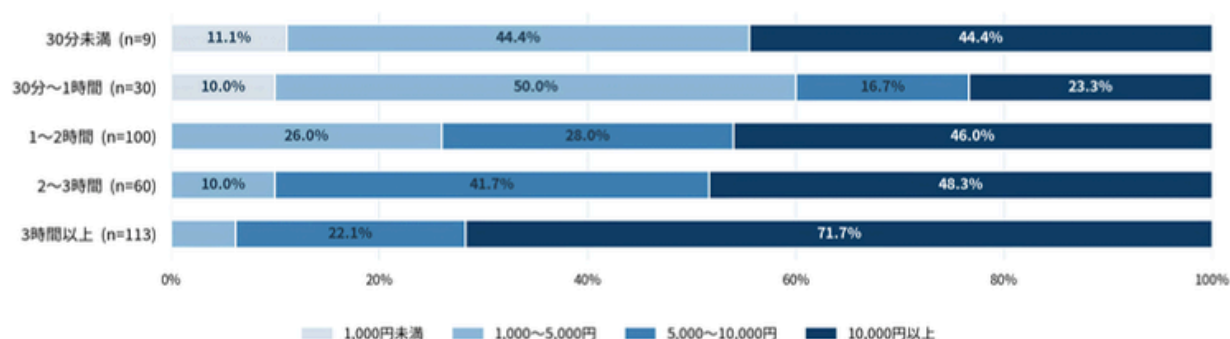


6-3 滞在時間と消費額

滞在時間と観光消費額の関係を分析した結果、唐戸エリアでの滞在時間が長い回答者ほど、高い消費額区分を選択する傾向がみられた。特に3時間以上滞在する回答者では、10,000円以上の消費を予定する割合が高く、他の滞在時間区分との差が確認された。

この背景には、飲食や買い物、複数の観光施設への立ち寄りなど、滞在中に行う活動の違いが関係している可能性がある。一方、短時間の滞在者にも高い消費額区分を選択する回答がみられ、滞在時間だけで消費行動が決まるわけではないこともうかがえる。

こうした結果から、唐戸エリア内での滞在を促すことは、観光消費の拡大を検討する上で重要な視点となる。ただし、調査で把握した金額は下関全体での消費予定額であるため、宿泊の有無や利用施設数なども考慮しながら分析する必要がある。

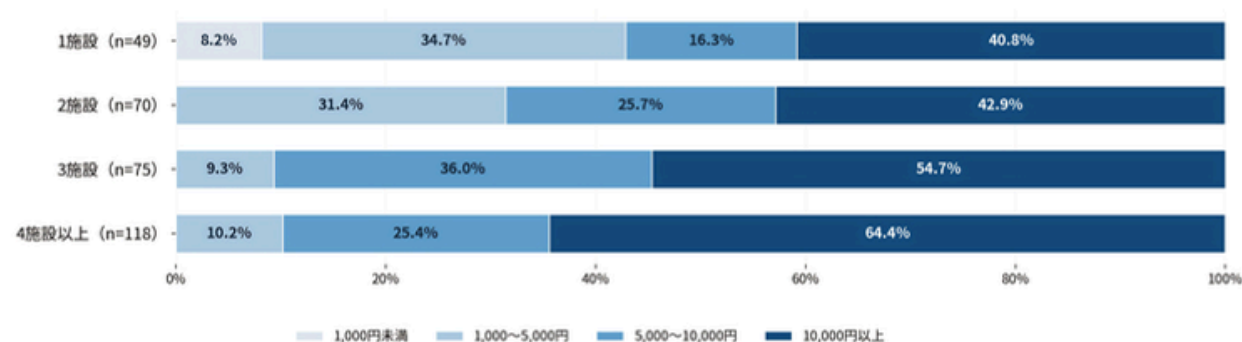


6-4 利用施設数と消費額

利用施設数と観光消費額の関係を分析した結果、複数の施設を利用する回答者ほど、高い消費額区分を選択する傾向が確認された。特に4施設以上を利用した回答者では、10,000円以上の消費を予定する割合が高く、利用施設数による違いがみられた。

この背景には、飲食や買い物、観光施設への入場など、複数の施設を訪れることで消費機会が増えることが考えられる。また、施設間の移動を伴う周遊行動が、地域での滞在や消費と関連している可能性もある。

こうした結果から、唐戸市場やカモンワープなどの主要観光施設を起点として、唐戸商店街や周辺観光施設への回遊を促すことは、観光消費の拡大を考える上で重要な視点となる。ただし、消費額は下関全体での予定額であり、施設利用数との因果関係を直接示すものではない。

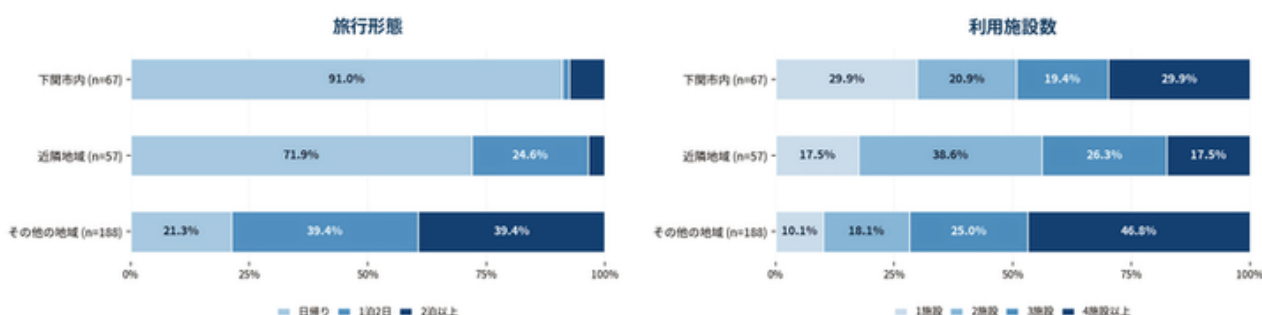


6-5 居住地と観光行動

居住地と観光行動の関係を分析した結果、下関市内の回答者は日帰りでの利用が中心となっている一方、遠方からの来訪者では宿泊を伴う旅行の割合が高く、旅行形態に明確な違いがみられた。

利用施設についても、下関市内では唐戸商店街やカモンワーフなど身近な施設の利用が目立つ一方、遠方からの来訪者では唐戸市場を中心に、海響館や門司港レトロなど複数の観光施設を組み合わせた行動が確認された。また、遠方からの来訪者ほど長時間滞在する傾向もみられる。

こうした結果から、唐戸エリアは市民や近隣地域からの日常的・短時間の利用と、遠方からの宿泊を伴う広域観光という、異なる来訪形態に支えられていることがうかがえる。それぞれの特徴を踏まえた観光情報の発信や施設間の回遊促進が、地域の観光振興を考える上で重要となる。



第7章 人流データからみた唐戸エリアの回遊構造

7-1 分析の目的と対象

本章では、第5章で整理した人流調査結果をもとに、唐戸エリアにおける歩行者の移動状況や、主要観光施設と商店街とのつながりについて分析する。

調査対象は、唐戸市場とカモンワーフの間、カモンワーフとあるかぼーとの間、唐戸商店街とカモンワーフを結ぶ地点の3か所とし、それぞれの通行量や時間帯別の变化、移動方向の特徴を比較する。

これらの地点は、唐戸エリアの主要観光施設を結ぶ動線と、ウォーターフロントから市街地へ向かう動線を把握する上で重要な位置にある。

各地点の人流データを総合的に捉えることで、観光客の移動が集中する場所や時間帯を整理するとともに、エリア内の回遊構造と今後の課題を明らかにする。



7-2 ウォーターフロントにおける主要動線

唐戸市場とカモンワーフの間、及びカモンワーフとあるかぼーの間では、いずれも多く歩行者通行が確認され、ウォーターフロント沿いに連続した人の流れが形成されていることがうかがえる。

特に唐戸市場からカモンワーフへ向かう方向の通行が多く、両施設が相互に関連する観光動線上に位置していることが確認された。また、カモンワーフからあるかぼーとへ向かう通行も多く、海沿いの観光施設を結ぶ移動の特徴がみられる。

一方、ウォーターフロントには大型駐車場が立地しているものの、観光客が集中する時間帯には満車となり、周辺道路で渋滞が発生する状況もみられる。このため、観光施設間の歩行者動線に加え、駐車場へのアクセスや車両の集中が、エリア全体の人の流れに影響する要素となっている。

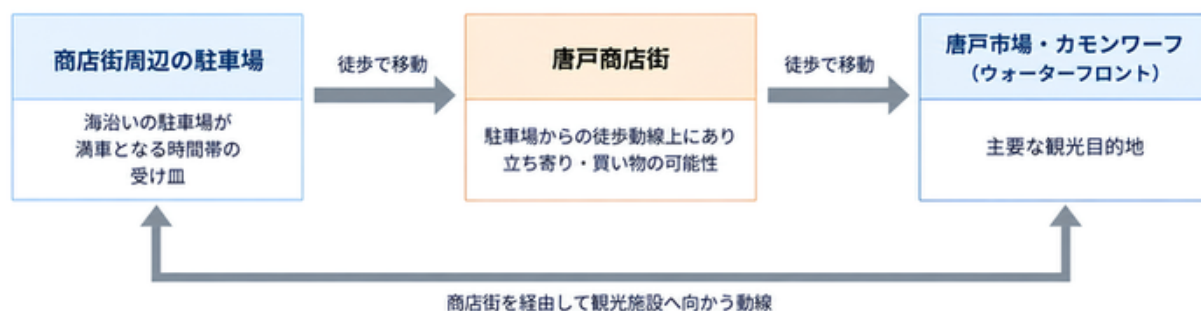
7-3 唐戸商店街とウォーターフロントのつながり

唐戸商店街とカモンワーフを結ぶ地点においても歩行者の通行が確認され、ウォーターフロントと市街地を行き来する動線が形成されていることが把握された。

この動線には、観光施設から商店街へ立ち寄る来訪者だけでなく、商店街周辺の駐車場を利用し、徒歩で唐戸市場やカモンワーフへ向かう観光客も含まれていると考えられる。特に海沿いの大型駐車場が満車となる時間帯には、市街地側の駐車場が観光客の受け皿となり、商店街からウォーターフロントへ向かう移動が生じている。

このことから、商店街とウォーターフロントの関係は、観光施設から商店街への回遊だけでなく、商店街側を起点として観光施設へ向かうアクセス動線としても捉える必要がある。

一方、駐車場から観光施設へ向かう歩行者が、必ずしも商店街の店舗を利用するとは限らない。今後は、こうした通過交通を商店街への立ち寄りや買い物につなげる視点も重要となる。



7-4 時間帯別にみた回遊の特徴

時間帯別の人流を比較すると、唐戸市場とカモンワーフの間では午前中から昼頃にかけて通行が集中する一方、カモンワーフとあるかぼーとの間では昼前後に多くの通行が確認された。

こうした時間帯の違いには、観光施設の利用時間や飲食行動に加え、駐車場の利用状況が関係している可能性がある。特に唐戸市場周辺では、観光客が集中する時間帯に大型駐車場が満車となることで、市街地側の駐車場を利用する来訪者が増え、商店街とウォーターフロントを結ぶ歩行者動線に影響していることも考えられる。

また、商店街方面の人流については、調査日によって通行量が増加する時間帯に違いがみられた。これらの変化には、観光目的の移動に加え、駐車場からの往復やイベント等による移動が含まれている可能性がある。

今後は、時間帯別の歩行者通行量と駐車場の満空状況を組み合わせて把握することで、観光客の移動実態をより詳しく分析できると考えられる。

7-5 回遊構造の特徴と課題

人流調査の結果から、唐戸エリアでは唐戸市場、カモンワーフ、あるかぼーとを結ぶウォーターフロント沿いに主要な歩行者動線が形成されていることが確認された。また、唐戸商店街とカモンワーフを結ぶ地点においても人の流れがみられ、市街地とウォーターフロントが相互につながっていることがうかがえる。

特に注目すべき点として、商店街周辺の駐車場は、ウォーターフロントを訪れる観光客の駐車拠点としても利用されていると考えられる。海沿いの大型駐車場が満車となる状況では、商店街周辺に駐車し、徒歩で観光施設へ向かう行動が生じている。このため、商店街は観光客の立ち寄り先であると同時に、ウォーターフロント観光へのアクセスを支える役割も担っている。

一方、商店街側の駐車場を利用する観光客が、商店街の店舗や地域資源を十分に利用しているかについては、今回の人流データのみでは判断できない。歩行者の通行を商店街での飲食や買い物につなげるためには、駐車場から観光施設までの移動経路上における案内機能や、立ち寄りのきっかけづくりが重要となる。

今後は、ウォーターフロントの駐車場混雑の緩和と、市街地側の駐車場の有効活用を一体的に考えることが求められる。あわせて、商店街から観光施設への歩行環境の充実や情報発信を進めることで、観光客の移動を地域全体の回遊や消費機会の拡大につなげることが期待される。

1 主要観光動線	2 駐車場の役割	3 今後の課題
唐戸市場・カモンワーフ・あるかぼーとを結ぶウォーターフロント沿いに歩行者の流れが集中している。	商店街周辺の駐車場は、海沿いの観光施設を訪れる来訪者にとって重要なアクセス拠点となっており、商店街への徒歩動線も一定数存在する。	海沿いに集中する歩行者・観光客の通行を、商店街への立ち寄り・消費につなげるための動線強化や仕掛けづくりが求められる。

第8章 総合分析

唐戸・カモンワーフ観光の現状と課題

8-1 観光客の来訪・滞在の特徴

観光客アンケート調査の結果、唐戸エリアには下関市内や近隣地域だけでなく、関東・関西・九州など全国各地から来訪者が訪れていることが確認された。日帰り観光と宿泊を伴う観光の双方がみられ、唐戸エリアが地域住民の利用拠点であるとともに、広域的な観光目的地としての役割を担っていることがうかがえる。

訪問目的では観光や飲食が中心となっており、唐戸市場やカモンワーフなどの施設が来訪の大きなきっかけとなっている。また、一定時間以上滞在する回答者も多く、複数の観光施設を組み合わせた行動がみられる。

一方、来訪者の居住地や宿泊形態によって観光行動には違いがあり、短時間の利用から複数日にわたる広域観光まで、多様な来訪形態が存在している。こうした特徴を踏まえると、唐戸エリアの観光を一律に捉えるのではなく、来訪者の属性や旅行形態に応じた滞在行動の違いを理解することが重要である。

8-2 観光消費と滞在・周遊の関係

観光消費額と旅行形態、滞在時間、利用施設数の関係を分析した結果、宿泊を伴う来訪者や滞在時間の長い来訪者、複数の施設を利用する来訪者ほど、高い消費額区分を選択する傾向がみられた。

このことから、観光消費は単一施設の利用だけでなく、旅行期間の長さや滞在中の活動内容、複数施設への立ち寄りなどに関連している可能性がある。唐戸市場での飲食や買い物を起点として、カモンワーフや周辺施設へ移動することは、観光客の活動機会を広げる要素となり得る。

一方、今回のアンケートで把握した消費額は下関全体での消費予定額であり、唐戸エリア内での実際の消費額を示すものではない。また、宿泊の有無や居住地など複数の要因が関係するため、滞在時間や施設利用数の増加が直接的に消費額の増加をもたらすと断定することはできない。

こうした留意点を踏まえつつ、滞在や周遊の充実が観光消費と関連する重要な要素であることが示唆された。

8-3 ウォーターフロントと商店街の関係

人流調査では、唐戸市場、カモンワーフ、あるかぼーとを結ぶウォーターフロント沿いに多くの歩行者通行が確認され、唐戸エリアの主要な観光動線が形成されていることが把握された。一方、唐戸商店街とカモンワーフを結ぶ地点でも歩行者の往来が確認され、市街地側と海沿いの観光施設がつながっていることがうかがえる。

この関係を考える上で重要となるのが、駐車場の配置と利用状況である。ウォーターフロントの大型駐車場は観光客が集中する時間帯に満車となり、周辺道路で渋滞が発生することがある。そのため、商店街周辺の駐車場に車を止め、徒歩で唐戸市場やカモンワーフへ向かう来訪者もみられる。

つまり、唐戸商店街は観光施設からの立ち寄り先であるだけでなく、ウォーターフロント観光へのアクセスを支える場所としての役割も担っている。

一方、商店街側の駐車場を利用する観光客が、実際にどの程度店舗を利用しているかは今回の調査では明らかになっていない。市街地とウォーターフロントの往来を、商店街への立ち寄りや地域内での消費につなげることが、今後の検討課題として挙げられる。

8-4 観光客の満足度と受入環境の課題

観光客アンケートでは、全体として高い満足度と肯定的な再訪意向が確認され、唐戸エリアを含む下関観光の魅力が来訪者から評価されていることがうかがえる。唐戸市場やカモンワープでの飲食・買い物、関門海峡の景観、周辺観光施設の集積などが、観光地としての魅力を構成していると考えられる。

一方、不足している施設やサービスに関する回答、自由記述では、休憩スペース、駐車場、トイレ、観光案内など、滞在時の利便性に関わる要望がみられた。特に観光客が集中する時間帯の混雑や、暑さを避けて休憩できる場所の確保などは、快適な観光環境を考える上で重要な課題である。

また、夕方以降の飲食や観光の選択肢に関する意見もあり、時間帯によって利用できるサービスに違いがあることもうかがえる。

今後は、既存の観光資源の魅力を維持しながら、移動・休憩・案内などの受入環境を整えることが、来訪者の満足度の維持・向上や滞在の充実につながると考えられる。

8-5 総合分析からみた主要課題

アンケート調査と人流調査を総合すると、唐戸エリアは唐戸市場やカモンワープを中心とした高い集客力を有し、広域からの観光客を受け入れる観光拠点としての特徴が確認された。また、飲食や買い物、複数施設の利用など、多様な観光行動が行われている。

一方、主要観光施設が集積するウォーターフロントへの歩行者や車両の集中、商店街方面への立ち寄りの状況、休憩・案内機能などの受入環境については、改善や検討の余地がある。

特に、海沿いの駐車場の混雑と商店街側の駐車場利用は、交通対策だけでなく、エリア全体の回遊構造にも関係する課題である。商店街側を起点とした徒歩移動を含め、観光客がどのような経路で施設を利用し、どこで飲食や買い物を行っているかを把握することが重要となる。

また、滞在時間や施設利用数と消費予定額の間には一定の関連がみられたことから、観光客の活動範囲や滞在機会を広げることも、地域全体の観光消費を考える上で重要な視点となる。

以上を踏まえ、唐戸エリアでは、既存の集客力を地域全体の回遊や消費につなげること、観光客の集中に対応した受入環境を整えること、来訪者の多様な行動に対応することが、今後の主要な検討課題として整理される。



第9章 調査結果を踏まえた今後の方向性

9-1 エリア全体の回遊促進

唐戸エリアでは、唐戸市場やカモンワーフ、あるかぼーとを中心としたウォーターフロント沿いに多くの観光客が集まり、主要な歩行者動線が形成されている。一方、唐戸商店街とウォーターフロントを結ぶ動線については、観光客の通行を地域内の立ち寄りや消費につなげることが課題として挙げられる。

今後は、主要観光施設を訪れた来訪者が、周辺の飲食店や商店街、歴史的資源などにも関心を持ち、自然に立ち寄ることができる環境づくりが重要となる。施設間の位置関係や徒歩での移動時間を分かりやすく伝える案内表示、周遊マップ、デジタル情報などの活用が考えられる。

また、商店街周辺の駐車場からウォーターフロントへ向かう観光客の動線にも着目する必要がある。商店街を単なる通過地点とするのではなく、飲食や買い物、休憩などの機会を提供することで、地域全体への観光効果の波及が期待される。

9-2 交通・駐車場環境の改善

ウォーターフロント周辺では、観光客が集中する時間帯に大型駐車場が満車となり、周辺道路で渋滞が発生する状況がみられる。一方、商店街周辺にも複数の駐車場が立地しており、海沿いの観光施設へ徒歩でアクセスするための駐車拠点として利用されている。

こうした状況を踏まえると、駐車場対策は個々の施設の収容台数だけでなく、唐戸エリア全体での駐車需要の分散という視点から検討することが重要である。

具体的には、駐車場の満空情報や徒歩での移動時間を分かりやすく提供し、来訪者が目的地周辺の混雑状況に応じて駐車場所を選択できる環境づくりが考えられる。また、主要観光施設への案内経路や歩行環境を整えることで、商店街側の駐車場を利用しやすくすることも重要となる。

今後は、時間帯別の駐車場利用状況や道路交通の状況を継続的に把握し、歩行者の安全性と観光客の利便性を両立する交通環境のあり方を検討する必要がある。

9-3 観光客の滞在環境の充実

観光客アンケートでは、唐戸エリアを含む下関観光に対する満足度や再訪意向が高い一方、休憩スペース、トイレ、駐車場、観光案内など、滞在時の利便性に関する改善要望が確認された。

特に、夏季の暑さや観光客が集中する時間帯の混雑は、来訪者の快適性に影響する要素である。今後は、日陰や空調のある休憩場所、分かりやすい案内表示、歩行者が安心して移動できる環境など、観光施設間の移動を含めた受入環境の充実が重要となる。また、子ども連れや高齢者、遠方からの来訪者など、多様な利用者の視点を踏まえることも必要である。観光施設そのものの魅力に加え、移動や休憩のしやすさを高めることで、満足度の維持・向上とエリア内での滞在の充実につながることを期待される。

9-4 滞在時間の延長と観光消費の拡大

アンケートのクロス分析では、宿泊を伴う来訪者や滞在時間の長い来訪者、複数の施設を利用する来訪者ほど、高い消費額区分を選択する傾向がみられた。このことから、観光客の活動範囲を広げ、滞在中の選択肢を充実させることは、観光消費の拡大を検討する上で重要な視点となる。

唐戸エリアには、飲食や買い物、景観、歴史的資源など、多様な観光資源が集積している。今後は、これらを個別の施設として捉えるだけでなく、来訪者が複数の場所を組み合わせさせて楽しめる環境づくりが求められる。

また、夕方以降の飲食や観光の選択肢に関する要望も踏まえ、時間帯によって異なる楽しみ方を提供することも検討の方向性となる。昼間の観光に加えて夕方以降の滞在機会が広がることで、地域内での飲食や買い物の機会が増える可能性がある。ただし、今回の消費額は下関全体での予定額であるため、今後は唐戸エリア内での実際の消費行動を把握することも重要となる。

9-5 継続的なデータ活用と関係者連携

本調査では、観光客アンケートと人流データを組み合わせることで、来訪者の属性や観光行動、消費予定額、主要地点の歩行者通行状況などを多角的に把握することができた。

一方、歩行者の通行目的や実際の移動経路、商店街での立ち寄り・購買状況など、今回の調査だけでは明らかにできない点も残されている。また、人流調査は限られた調査日の結果であるため、季節や天候、イベントの有無などによる変化については継続的な確認が必要である。

今後は、観光客アンケートや人流計測に加え、駐車場の満空状況、施設の利用状況、店舗での消費動向などを組み合わせることで、より実態に即した分析が可能になると考えられる。さらに、唐戸市場、カモンワークス、商店街、駐車場運営者、行政などの関係者が情報を共有し、エリア全体の状況を把握することも重要である。継続的なデータの蓄積と関係者間の連携を通じて、観光振興や受入環境の改善に向けた検討を進めることが期待される。

9-6 まとめ

本調査により、唐戸エリアは唐戸市場やカモンワーフを中心とした高い集客力を有し、広域からの観光客を受け入れる重要な観光拠点であることが確認された。また、宿泊形態や滞在時間、利用施設数と観光消費との関連がみられ、来訪者の滞在や周遊が地域の観光振興を考える上で重要な要素となることが示唆された。

一方、ウォーターフロントへの歩行者や車両の集中、商店街への立ち寄りの状況、休憩・案内機能など、エリア全体で検討すべき課題も明らかとなった。特に、商店街周辺の駐車場を起点とする観光客の徒歩移動は、交通対策と地域内の回遊促進を一体的に考える上で重要な視点である。

今後は、既存の観光資源の魅力を生かしながら、交通・駐車場環境の改善、歩行者の回遊促進、滞在環境の充実、観光消費機会の拡大を総合的に検討していくことが求められる。

本調査で得られた結果が、唐戸エリアの現状に対する共通理解を深め、行政や観光関連施設、商店街などの関係者が今後の方向性を検討するための基礎資料として活用されることを期待する。

図 9-6 調査結果を踏まえた今後の方向性（総括図）

